



「社会への恩返し」



なか むら ゆ き
中村 有希
1938年(昭和13年)
神奈川県足柄郡山北町
生まれ、平井在住。

■ 私は『万引きGメン』

「ここに置いたバックがないんです!」私はうろたえてしまっ、店員さんも一緒に探してくれたけどやっぱり見つからない。昭和53年10月のことでした。

その日は、つらいことが重なっていた日ごろの気晴らしにと、初めて銀座のデパートに買い物に行ったんです。気に入ったコートを試着したらちょっと大きかったので、サイズを変えようとしてほんの1、2分荷物から目を離した際に、銀行でおろしてきたばかりの現金が入った新しいバックを置き引きされてしまった。交番で被害届を出して帰りの電車賃を借りて帰ってからも、自分の迂闊さ^{うかつ}に腹が立ち、悲しいやら悔しいやら。犯人に対しても「なぜ人のものを盗むの。恥ずかしくないの」とずっと気持ちが治まらなかったの。

この事件があつてから3年後の同窓会で、その話を友だちに話したら、「万引きや置き引きを捕まえる保安員っていう仕事があつて、主に女性の仕事なんだよ」って言うんです。保安員という仕事に興味を持ったもの実際に仕事とするまでには、しばらく悩みましたよ。でも、40代半ば、自分がすべき仕事は何なのか、このままではいけないと、昭和59年に警備会社に就職しました。最初は給料も安くて、アパート代を払ったら生活費が2、3万円しかないこともありました。それでも、保安員を続けたのは、置き引きされたことへの怒り。あと、自分の人生をこのまま終らせるもんかっていう強い信念。

貧乏はね、子どもの時からしているから、もうたくさん。保安員は能力給だったから検挙率を上げれば、給料も良くなるんですよ。入ったからにはトップにならなくちゃいけないと思って、休みの日でもひとりでお店に入って、いろんな人を観て勉強しました。そうしたら、3年くらいで万引き犯がわかるようになりました。

保安員を始めて10年くらい経ったころ、「本を出してみたら」って話になって、平成7年に『万引き日誌』を出版したの。保安員っていう仕事は、警察に行つて調書を取られるから、その日のことを鮮明に話ができるくらいに書いておかないといけな。それで保安日誌以外にも、見たこと感じたことをノートに書いていた。だから、本が書けた

の。それが思ったより評判が良くて、テレビドラマ化され、テレビやラジオへの出演の仕事も入るようになって。会社も普通だと60歳で定年なんだけど、定年後も頼まれて65歳まで続けました。

■ 波瀾の日々

私は9人きょうだいの4番目。神奈川県足柄郡山北町に住んでいたけど、家族を養うために母がうんと苦勞して、行商したりして生活していたの。でも母は「人を恨んだりしたら自分に返ってくるよ」って。近所の人も、「あのおばさん、一所懸命働いているのにかわいそう」って、助けてくれた。私がお腹を空かせていたらおにぎりくれたり、お芋くれたり。だから私も「人に優しくしてもらっているから生きていける。私もできることはしなくちゃ」って気持ちが強くなりましたね。

でも、小学校の給食費とか学級費の10円を「ちょうだい」って母に言えないくらい貧乏だったから学校でいじめられもした。勉強は大好きだったけど、中学卒業前に、年齢をごまかしてラーメン屋さんに奉公に出た。住み込みですよ。口減らし。毎日たまねぎの皮をむいて、学校に行きたいって、ずっと思っていましたね。

18歳の時にお見合いで父が決めた人と結婚。すごい暴力夫で、今でいう「DV」。お酒飲んでぶったり、蹴ったり、もう近所じゃ知らない人がいないくらい。子どもたちを抱えて、よそのうちに飛び込むと押入れにかくまってくれるの。父に辛抱しろと言われてたけれど、治らなくて、暴力のために地獄の生活。10年我慢したけど、私1人で家を出たんです。主人が子どもは絶対に離さなかったから。

昭和40年代は、まだ離婚が珍しい時代だったので近所の目もあるし、実家には帰れなくて、御殿場にいた長兄のところまで1年間手伝いをしていました。でも、そこも長くはいられて、友だちを頼って松戸に行きました。ところが、仕事がない。友だちから少しお金を借りて、小料理屋を始めました。けれど、男の人にお酒を売る商売が、私にはできないんです。別れた主人が酒乱だったから、酔っ払いが怖い。子どものことも頭から離れないし、いろんなつらい思いもあった。ずっと我慢したけれど、結局店

をたたんで警備会社の保安員になったんですよ。

■ ありがたいの思い

今も治療はしているけれど、ボランティアで全国万引犯罪防止機構の推進員をしているの。犯罪者はつくってしまっからじゃ遅いんですよ。警察は何か起きなければ動けない。私たちはそうじゃなくて、起きる前に何とか減らそう、無くそうという組織なんです。

区内の警察や少年センター、小松川第二中学校にも保安員としての体験談を話しに行ったことがあるんですよ。講演が終わると生徒や先生から「ありがとう」って言われるんですけど、「私の方こそ、思いを聞いていただいてありがとう」って言うんです。私の友だちがよく言うの、「中村さんは必ずありがとうって言葉を言うよね」って。だって、言わなくても分っているからいいじゃなくて、親子や夫婦でも「ありがとう」の気持ちを絶対に伝えるべきですよ。

私ね、昭和51年に江戸川区に引っ越して来る時、どこに住もうかと思って、いろいろ東京23区内のことを勉強して、犯罪白書も見たりして住環境を調べたんです。そしたら、江戸川区が一番落ち着いているし、高齢者の福祉は進んでいる。だから、江戸川区を選んだの。それなのに、今の江戸川区は犯罪が多い。それがすごく嫌なの。だから、72歳になった今でも、私が動ける間は少しでも江戸川区を良くしたい。区内の犯罪が1件でも少なくなってくれればと思って活動しているんです。

「今ここで、犯罪をしようとしている人はよく考えて。前科がつくの、罰金もつく。自分の人生を駄目にしないで。無駄にしないで。私はあなたを信じているよ」って、いつも言うんです。そうすると人間変わりますよね。講演会や本で伝えたいのはそれなんです。

保安員をしていたころに、万引きをした人のケアのために、長期で面談を続けていたら、「検挙してくれて、かえってよかった。ありがとう」って泣かれちゃったことがあったの。私と話して彼女の精神状態が変わったら、家族も変わって関係が良くなったんだって。いろいろな人を見できたけれど、悪い人ばかりではない。してしまったことは悪いけれど、大事なのはその後よね。生まれた時はみんないい心で生まれてきているのに大人になって、生き方によってだんだん変わってきってしまう。特に女性の場合はね、相手によって変わりますね。私自身もそうだったし、それはもう実感しています。

癌の治療で生活は楽じゃないけど、今はとても幸せ。みんなに支えられて自分の人生を変えられたなって思う。だから、命がある限りは「ありがとう」って伝えていきたいわ。

■ 学校へ行く

警備の保安日誌を書く時にね、字がわからないんですよ。学校を出てないから独学で勉強した。いつも辞書を持って歩いて、それを見ながら書いた。でも、例えば「わかる」と引くと、解る、判る、分るってある。今度はどういう意味の違いがあるのか知りたくて。もう、学校に行きたくて、行きたくて。それでも、15年近く我慢しました。

兄と姉が早く亡くなったので、私が母を看取ったんですよ。母が亡くなって、61歳から区立小松川第二中学校夜間学級に通い始めました。まだ会社に行っていたから、どうしても仕事の都合で遅刻してしまう。遅刻するようなら入学は認められないって断られて、それでも何回も何回もお願いしてやっと入学できたんですよ。うれしくて人の倍、勉強しました。夜間中学は外国人が多いんですが、私は日本人だからある程度は読めるし書ける。だから国語は得意。中学は楽しかった。大好きでした。

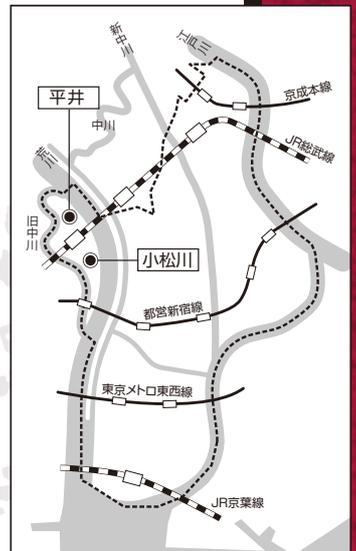


◆講演会で自らの体験を語る中村さん

65歳からは都立一橋高校の定時制に行きました。そこで、数学がすごく分かり始めて、数学の時間は他の子が騒ぐと頭にくるくらいに好きになっちゃったの。最高でしたよね。学校に行くと、私の性格は変わりました。以前は、コンプレックスがあったから、人と話すことができなかつたんですよ。それまでの人生や保安員の仕事の中でも感じたけれど、人の心って難しいですよ。だから、高校の次は大学に進学して心理学を学びたいと思い始めていました。

そのころ、ふとした拍子に、右太ももの付け根あたりにシコリがあるのに気がついた。病院に行ったら「悪性リンパの癌。かなり進んでいて、危ない」って言うわけ。でも、高校の代表に選ばれて体験発表をする予定があったから、「私、死ぬ前にやることもあるから」って、発表会が終わってから入院したの。主治医は最初3ヶ月って言ったけれど、「こりゃ、3ヶ月もない。もっと危ないな」って思ったんですって。

抗がん剤治療の副作用で髪が抜けて、嘔吐して苦しいし、何も食べられない。やせ細っちゃって40キロ切ったこともあった。でも周りの人たちに元気づけられたり支えられたりして、発病から5年経ちました。



◆インタビュー／2011年5月
◆聞き手／勝倉洋子 長井沙織 米田有貴子
◆コーディネーター／磯谷真理子 樋口政則 小野塚和江